ダイバーシティリレーエッセイ～様々なひとの多様な視点～

昭和から令和にかけて

Now and then

大瀧　光弘

事務局から原稿執筆を依頼されて引き受けたものの，1956年（昭和31年）2月生まれの私が育った時代にはダイバーシティという言葉すら存在していなかった。

高校卒業まで過ごしていた山形県鶴岡市という田舎では，当時は家父長制の時代であり，男性が稼いで，女性は結婚後退職して専業主婦となり良妻賢母でいることが当然のように考えられていた。当時の早稲田大学理工学部金属工学科で同期の女性は0名であり，就職して配属された日光の研究所でも大卒スタッフの女性はまだ0名という時代であった。昭和から平成，令和と時代が流れ，企業を定年退職後に縁あって現在従事している横浜国立大学の材料系学科では女子学生が学んでいるのはもちろんのこと，さらに海外からの留学生の存在も当然の時代になった。航空機などの交通手段の進化とともに，インターネットを介した通信手段の著しい進化によって，経験や情報の共有化が全世界的に広がったことが大きく時代を変革させたと感じている。ちなみに著者が入社した1986年当時はPCの黎明期であり，研究所でもWindows3.1のOSのPCが1課に1台導入され始めたころで，著者が最初に購入した自宅用PCはOS：Windows95，HDD容量：2 MBであった。この約40年のすさまじい変化がよくわかる。

2003年に発表された日経連のレポートをきっかけに，多様な人材が集まっている状態で一人一人のもっている違いを認め尊重するダイバーシティと，その状態を発展させ多様な人材が一体となって働いている状態を指すインクルージョンの2つの取り組みを両立することで，人材が定着し経営上の成果を出すことにつながるとする「ダイバーシティ＆インクルージョン」の概念が日本でも浸透し始めたようである。

個々人の違いを認め尊重するには，具体的にはどうすべきなのか？　まずは自分自身のもっている「当たり前」「常識」を「その常識はいつの，どこの，誰の常識？」と疑うことから始めてみてはどうだろう。自分の考えと異なる考えは，初対面で受け入れにくいことは心理的に自然であるが，自分の考えと異なる考えを拒否するのではなく，1つの意見として取り入れることは可能であろう。自分とは異なると結果的に判断しても，反発して対立するのではなく，「尊重する気持ち」や「自分と違う考えを許容する心」をもちたい。自分と他人を比較する際に，無意識のうちに，強者のおごり，弱者に対する優越感をもちがちである。可能な限り，弱者に対する思いやりを忘れずに過ごしていければ良いと思う。吉川 英治の造語とされている「我以外皆我師也」を心に刻み，謙虚さと向上心をもつことを心がけたい。

横浜国立大学　大学院工学研究院システムの創生部門　技術補佐員

ダイバーシティの実現に向けて

For diverse society

池尾　直子

本稿執筆についてお声がけいただいたとき，まず思い浮かんだのが，今年1月に93歳で鬼籍に入った同居の母方祖母（父は婿養子）との価値観の衝突である。私に多大な影響を与えた祖母は，高等女学校から師範学校に進学した（祖母の認識に基づいた表記としている）。勤労奉仕や旧制中学校と高等女学校間での課程差などが原因で，師範学校での勉強は苦労を感じるものであったようだ。期末試験のときには，監督役の教員がそっと部屋を出て，同級生の男子がさっと立って全体に向けて試験内容のアドバイスを行うと，監督役がまた戻ってきたという思い出話を，小学生の頃に何度も聞かされたものである。だからこそ祖母は，私の学業成就を両手を上げて応援してくれた。ただそれと同時に，おもちゃ，服装，帰宅時間など，祖母にとっての「女の子」の規範に従わせようとする意識は極めて強かった。間に立たされた母からは，私は頑固で取り入れず好き勝手していたと指摘されるのではあるが，その影響は私には十分強く，大学生の頃は好き嫌いとは別に，ピンク色やレースのついたものを身に着けることができなかった（今でも苦手意識はまだ残る）。大学での教養科目で「男性学・女性学」といったフェミニズムとの出会いや，高校生向けの男女共同参画イベントの手伝いなどは，そういった心のささくれを確かに癒やしてくれるものだった。

けれども，本学会の男女共同参画委員を拝命して数年が経つ今，社会での一部の「ダイバーシティ実現」に向けた運動には葛藤を感じる。「ダイバーシティ」とは，多様な価値観の共存であると私は考えている。しかしながら，例えば女性の権利について考えると，「女性が輝く社会」と謳ううちに，専業主婦という価値観を否定するきらいが見受けられる。また，ごく一部ではあるが，「多様性を実現する“正しい価値観”を広めよう」という価値観の統一を目指したものになっていないか，と感じることがある。こうした運動の下では，「女性らしさ」にこだわった祖母の価値観は誤りと一刀両断されるのだろう。そして，伝統を残したいと思うことのある私の価値観も，悪だと否定されてしまうだろうと感じる。

公共の福祉に反しない限り，さまざまな意見が存在する社会こそ本来目指すべき姿であると考える。今後このような矛盾に陥らないよう，多様な価値観の包摂を目指して，引き続き努力していきたい。

息子（2歳）に選ばれし者たち

神戸大学大学院工学研究科機械工学専攻　准教授